

野間宏研究序説——「暗い絵」「崩解感覚」「真空地帯」

尾西康充

日中戦争から敗戦後までの日本社会を知識人層の青年の視点から描き出したのが野間宏の文学である。言論の自由が制限され、共産主義思想が治安当局による弾圧の対象になった時代、学生の間に治安維持法の犠牲者が多数出た。ある者は獄死し、ある者は転向して生き延びた。その痛ましい体験をもとにして、野間は数々の小説を創作した。野間の小説に共通する特徴

は、歴史の客観的必然性に従って革命運動が昂揚して最後にプロレタリア革命が成就するという発展史観ではなく、一連の運動のなかで犠牲になった人びとの「名もなき無意味な痕跡だけを残すすべてのものの視点」に立脚していることにある¹⁾。

スラヴォイ・ジジエクは、スターリンの進化主義的な「勝者」の視点による革命史ではなく、進化の連続性が断たれる「鬱滞」の瞬間から歴史を構成する、ペンヤミンの「最後の審判」の視点を評価する。

だからこそ、ペンヤミンにとって、革命とは革命の連続の中に書き込まれる現象ではなく、むしろ、そこで連続が断たれる「鬱滞」の瞬間であり、その瞬間に、先行する歴

史の構成、すなわち勝者たちの歴史の構成が打ち消され、革命の成功を通して週行的に、すべての仕損じられた行為が、そして支配的テキストの中で空虚な痕跡として機能する過去の失敗した試みのすべてが「解き放たれ」その価値を受け取ることになるのである²⁾。

日中戦争勃発前後の左翼学生運動を作品のテーマにした「暗い絵」（一九四六年）は、非合法運動にかかわって獄死する学生たちの姿がきわめて印象的に描き出される。主人公の深見進介は、友人の死を悼みながらも転向して釈放され、軍需会社就職して戦後まで生き延びる。大阪大空襲で焼失したブリーゲルの画集に青春時代の記憶を重ねながら、全国の高等学校を追放されたり、処分を食らったりした者たちが京都帝国大学に集まって、京大事件以来消え去ろうとしていた左翼勢力が勢いを取り戻した時代——《暗い花ざかり》——の目撃者として、思想弾圧によって断ち切られた友人たちの短い生命の輝きを語りつぐのであった。

だが、深見の主観が色濃く反映されたその内容は、弾圧と戦

争を生き延びた深見の現在の位置から遡及して再構成された過去の記憶であった。永杉英作と羽山純一の「弔い合戦」を企てて検挙され、獄死したという木山省吾の行動は、実は、木山が獄死したことを知った深見が後からその意味を付与したものであった。木山の行動は、本来「弔い合戦」をおこなおうとして果たせなかった深見の欲望を引き受けたもので、深見にとつて木山は、彼が同一化する《想像的な他者》であったといえる。

野間 は、京都帝国大学文学部仏文科に在学していた頃の日記のなかで、「私にはプロレタリアートが感ぜられない。どうしてだ、どうしてだ」(一九三五年一月七日)、「私にはプロレタリアートがつかめていない」(二月一日)と告白している。日本労働組合評議会に所属する羽山善治や矢野笹雄、堀川一知などの革命的労働者を知りながら、なぜこのような言葉を記していたのだろうか。

「暗い絵」のなかには、「或る時神戸の全国評議会に属する労働者出身の革命運動家の一人」が非合法学生グループの羽山純一に向かつて、「ほんとうの偉大な革命家はやはり労働層から出ると思うね、インテリからではないぜ」という。すると、羽山は「いや、そりゃ、一概には言えませんが。これまでの日本の革命運動はすべてインテリが主体だったんですからね」と反論する。

また、学生共済会の合法主義者小泉清は「日本は未だナロードニキの段階にも達していない」という。小泉によれば、「日

本には人民の友というようなたといその地盤がプチ・ブルジョアであろうと、農民の独自性の立場から立ち上つてきた動きさえないのだからね」というのがその理由なのだが、彼の意見に対して羽山は「しかし、そのナロードニキは旧ナロードニキなんで、ナロードニキ自体後にはナロードニキそのもののうちで腐敗して行くんだよ」と、知識人が一般民衆のなかに身を投じようとする行動そのものを無意味なものとして批判していた。

永杉や羽山たちは、知識人学生の過大な自負心ばかりが目立ち、頭のなかにある理論ばかりが先行している。労働者や農民と連帯してプロレタリア人民革命を実現するにはどのようにすればよいのか、その具体的な計画がないのである。一九三八年一月三日に発表された第一次近衛文麿内閣が東亜新秩序建設声明を発端に「国内体制を強力に仕上げて来る」ことが予想されたのに対して、永杉は「ところが一体俺達には何がある。何もありません。バラバラな離れ離れの一つ一つの意識だけがある」と語ったうえで、労働者と知識人が連帯した「人民戦線は破れるよ」とさえ断言していたのである。

知識人学生の過大な自負心がみられることは、「足で稼ぐ癖」を持っているという農民組合のオルグ赤松三男を例外として、小泉たちのグループにも永杉たちのグループにも共通する。小泉たちの「哀れな学生達の自尊心を点綴した食堂の奥の風景」として、「青年の集りに特有の各自が各自の独自性を相手に認めさせようとする工夫、それに伴う心理的抵抗、および精

神の焦燥が暗い電灯の下でひしめいていた」と描かれている。他方、永杉を批判する木山の言葉にも、学生の間での「価値評価の低さを、いつも気にしながらその侮辱に打ちひしがれ、何かの折にその価値評価を覆そうとする彼の反抗」が感じられたとある。これらの心理的な反抗は、『抵抗 (Widerstand)』と呼ばれる葛藤で、『理想自我』への一体化への抵抗を意味しているのだが、それは学生集団における強い同調傾向に対する反動であるといえる。

高等教育を受けた男子学生のホモソーシャルな人間関係にみられる想像的同一化は、心理的な『転移 (Übertragung)』を想起させる。この傾向が最も顕著にみられるのは、軍隊組織の非人間的性質を告発した「真空地帯」(一九五二年)である。下士官や兵士たちが女性の言葉を使いながら卑猥な態度を示す。女性を性的玩具とすることによって集団の結束を高めている。

曾田原二一等兵は大学卒業者で、中隊事務室において人事係助手を務めていた。大卒者は幹部候補生として早くから少尉に任命されたのだが、前線に送られる可能性が高い。曾田が早期除隊を願ってそれを拒否したのは「反戦的な社会主義的な思想」を隠し持っていたからであった。兵士不足のため徴兵猶予が停止され、学徒出陣兵が入営していた一九四三年一月、木谷利一郎一等兵が陸軍刑務所から釈放されて原隊復帰する。曾田にとって、木谷は上官の財布から金品を盗んだ「窃盗犯」であるだけでなく、「軍機密にかなする犯罪に責任のある思想犯」で

もあつた。曾田は木谷の暴力性に目をつけて、自己の欲望を木谷に転移させた——「木谷の手は真空地帯をうちこわす」。

曾田が木谷に、木谷が野戦行きになったのは金子軍曹の差し金によるものであつたことを明かすと、木谷の運命が大きく動きはじめた。金子の背後に林中尉がいると推測した木谷は、二中隊の林を探し出し、自分が軍法会議にかけられた経緯を聞きだし、師団上層部も関与した冤罪事件の真相を知る。金子と結託して木谷の野戦行きを決めた立沢准尉のいる中隊事務室に抗議に押しかけ、曾田から聞いた「金子と立沢の間でかわされた話」をぶちまけてしまおうとした。しかし曾田の「その顔の白いのをみた」後、曾田が近寄ってくるのを見るとそれを話す気は急に失せてしまった。事務室を出てから曾田は「金子班長の話、自分からきいたと准尉さんというてくれはっても、いいですよ」というのだが、木谷は「いいや、ええよ。」と心える。発した言葉とは裏腹に、このとき曾田は木谷に「言つてはならない」というメッセージを送っていたのである。曾田は准尉が決めた不寝番の勤務表や野戦行きの人選を、誰よりも早く知る立場におかれていた。「中隊の頭脳」に近い彼は、木谷はもとより下士官や兵士たちからみれば『知を想定された主体』であつた。

しかし、曾田は冤罪事件の黒幕中堀大尉が師団経理部にいるかどうかを調べてみるというのだが、木谷は「だまってる何か考へこんでいた」。このとき木谷は曾田からの転移を解消しよう

としていたのである。

同じ日、兵舎に戻って消灯後の一時すぎ、曾田が木谷のもとにやって来て、中堀が師団経理部にいることと、不寝番と衛兵には監視を厳しくする命令が新たに出されたことを伝えた。明日の転属の前に逃亡者を警戒していたのである。曾田は木谷の返答を待っているようであったが、木谷は「余り曾田と言葉を交さなかった」。曾田は木谷に中堀のところにやって報復し、再び軍の規律を破ることを期待していたのだが、このときすでに彼は、曾田による幻想を横断し、逃亡を考えていたのである。

野間の文学は、事件の目撃者の立場から描かれている。だが単に目撃するだけではなく、自己の欲望を他者に転移させているのである。同じケースは「青年の環」（一九四七～七〇年）でもみられ、日中戦争勃発にともなって戦時体制が強化されたことへの反発を抱く矢花正行は、政府に対する民衆蜂起が被差別部落で生じることを期待する——「爆発せんのかな」。爆発せんのかな。木谷の暴力性も、彼が被差別部落で生まれ育ったことを背景にしてイメージさせる設定になっている。

古典的なマルクス主義では、前衛の知識人が労働者に階級意識を目覚めさせて革命を勃発させる。この意味からすれば、野間の文学はまさに知識人の立場から描かれた革命の文学といえるだろう。ところがジジエクが指摘するように、「労働者階級が革命主体として機能しないことは、ボルシェヴィキ革命の核にある問題であった」³。飢えた人びとが必ずしも盗みをするわ

けではないし、労働搾取される人びとが必ずしもストライキをするわけでもない。彼らは屈辱や奴隷状態に忍従するばかりか、むしろ圧制政府の誕生を歓迎してしまう傾向を持つのである。現代のアメリカ社会でも、環境汚染に苦しむ人びとが環境保護の予算をカットする人物に投票し、失業して生活費に困る人びとが生活給付金を廃止する人物に投票するのである。そんな事があり得るのか——それが《ランプ現象》であったのである。この事実を考慮に入れば、「労働者階級の存在自体およびその社会的状況には元来、階級意識の発生が備わっているがそれを妨げる無意識のリビドーのメカニズムがある」という点に昭和期における革命運動の敗北の原因が求められるといえるのではない⁴。

木谷は個人的な怨恨を持つものの、陸軍組織をその根底から破壊しようと考えていたのではないし、「青年の環」の島崎は、革命思想を通じて差別を解消しようとしていたのだが、革命自体はその手段の一つにすぎない。いうまでもなく田口吉喜の反社会性は許されないものであった。

彼の代表作である「暗い絵」「崩解感覚」（一九四八年）「真空地帯」を取りあげて、知識人層の青年の視点から描き出された野間の文学を俯瞰してみよう。

「暗い絵」——主体の《穴》

《象徴的去勢》とは、言語の使用を通じて、モノと身体との直接的な関係が失われ、意味に満ちた世界という象徴的なレベルで、主体が自己を獲得するプロセスを指す。「暗い絵」冒頭に紹介されたブリュゲルの絵に描かれた《穴》——「漏斗形の穴」が大地の所々に、「爬虫類のような尾をつけた人間」の股間に開いている——は、一体何を意味しているのだろうか。作品全体を通して読者に暗鬱な印象を与えつつける「暗い穴」の意味を、《象徴的去勢》の理論を手がかりにして考えてみたい。

深見進介によれば、「尾のある人間」が股間の「暗い穴」を凝視しているのは、「圧しつぶされた生命がただ何処か最後の一局部で生きている、こうした暗い不潔な醜い部分にのみ生きているのをその不潔な部分が羞恥している」ようにみえる。「暗い穴」は、専制政治下のオランダ農民の「人間の自覚の形」であったと解釈されるのだが、深見にとつては、ブリュゲルが描いた一六世紀の農民にとどまらず、一九三〇年代の天皇制絶対主義下の日本社会を生きている「俺達の魂そのもの」であった。

深見は、永杉英作、羽山純一、木山省吾の非合法活動の学生グループに接すると、「やはり俺の来るべき処、俺の居るべき処はこの他にはないという風な感じ」になる。しかし永杉のあ

まりに急進的な考え——「日支の衝突を日本の支配階級の最後の危機」と判断し、「プロレタリア革命への転化の傾向を持つブルジョア民主主義革命」が「二年以内」に到来する——を聴くと、「やはり俺の道はここから離れている」と思わざるを得ない。深見は、永杉たちに対する違和感の原因が自分の「政治認識の能力の不足」にあることは自覚しながらも、「政治的に解決点を導き出し得ない故に暗い眼かくしのようなものを施された彼の心が心の暗闇の中で悶える悶え」が生じているのを認めないわけにはいかなかった。

しかし彼にはその違いを言葉に出して言うことは出来ないし、また文章にして示すことも出来ないのである。その眼かくしをされた心が触れる熱い暗い抵抗のようなものがある部分を信じながら、彼は彼の心を日本の心の尖端であると感じるのである。そして誰かにはやくこの心を示したい、この心の言葉を誰かに伝えたいと思うのである。

自己の感情を言葉にできない葛藤、そこに介在していたのは、言語による象徴的秩序に回収されない《現実的なもの》であったのではない。すなわち、彼らの前に立ちはだかつたのは、最高刑が死刑と厳罰化された治安維持法第一条第一項——「国体」変革の罪——による獄死の恐怖であった。永杉たちが絶対視するコミンテルンの「三二年テーゼ」は、帝国主義戦争およ

び警察的天皇制反対、労農政府樹立に向けた人民革命をスローガンにしていた。『絶対主義的天皇制を打倒せよ』というミッションは、「国体ヲ変革スルコトヲ目的トシテ結社ヲ組織」した者たちは死刑に処すとされた治安維持法の標的にされたのであった。深見進介は、合法主義者として「自己を卑下している」小泉清を思い浮かべながら、「しかしこの俺が捕われたらどうだろう。俺はテロには弱い。きつと持ち応えられまい。死ぬかも知れんなあ」と告白していた。「熱い暗い抵抗のようなもの」とは、コミンテルンの「三二年テーゼ」という《象徴権力》に対する《転移抵抗》(Ubertragungswiderstand)であつたといえるだろう。

野間の友人小野義彦は、滝川事件を発端に盛り上がった京大學生運動を継承し、学友会の民主化や、学部別の三〇をこえる研究会の組織化、「文化の擁護」「自由の防衛」を謳った「学生評論」創刊など、京大左翼学生グループのリーダーとして積極的に活動していた。さらに、野間宏を通じて知遇を得た羽山善治や堀川一知、矢野笹雄たち阪神間の労働者グループと接触を持ち、治安当局による弾圧を警戒しながら、広汎な大衆運動を展開しようとしていた。

しかし、日本共産主義者団のオルグ竹中恒三郎から人民戦線は「反革命的日和見主義にすぎない」、解党主義者「メンシエヴィキ的左翼合法主義者の裏切り者だ」と執拗に迫られた永島孝雄は、学生の指導者たちを説き伏せ、最終的に京大ケルンを

地下活動に引き入れたのであった。

日本共産主義者団の「大衆運動から遊離した街頭的なセクト主義」に反対していた小野でさえ、「当時はこのテーゼは絶対正しいという信念が一般的」で根本的に疑ったことはなかったという。⁵⁾「暗い絵」に登場する合法主義者小泉清もまた、合法／非合法の路線の違いはあっても、その信念に関しては共有しており、社会主義革命そのものを否定しているわけではなかった。ただ、ブルジョアジーの勢力は依然として「鞏固」であるため、「日支の衝突」が「日本の支配階級の危機」にはならない、学生が蹴起するのは時期尚早だと考えていたのであった。

コミンテルンの「三二年テーゼ」を前にした知識人学生たちのたじろぎ。「共産党員は殺してもかまわない」とさえ考えていた特高警察の捜査官による苛酷極まる拷問は、築地警察署内の留置場における小林多喜一の虐殺死のように、死という現実的なものを活動家たちにみせつけることになった。⁶⁾「暗い絵」のなかでブリューゲルの絵に投影された《穴》は、「三二年テーゼ」におけるコミンテルンという《象徴権力》の絶対性への信仰によっては回収することできない、個人の死という《現実的なもの》を意味していたのではないか。知識人学生にとっては、獄死の恐怖は到底言語化できるものではなかったのである。「覚悟をきめた」永杉でさえ、深見からみれば「あいつの性格ではその覚悟の要求するものに堪えられないかも知れないと感じて来ている。それであせっている」というところだ」

とされているのであった。

深見進介は「自己完成の追究の道をこの日本に打ち立てるということ」を目指していた。深見によれば、それは「科学的な操作による自己完成の追究の努力の堆積」によって示される「日本の心の尖端」であった。おそらく深見のいう「自己完成の追究の道」は、貧困にあえぐ人びとを社会の桎梏から解放するだけではなく、エゴの自己保存欲求、すなわち弾圧による死の恐怖から学生たちを解き放ち、生き延びることを意味していたのである。その二つの課題を達成するためには、眼前の社会現実に対するたゆみない研究による科学的な革命理論を、自分たちの手で編みださなければならなかったのである。

非合法学生グループの木山の眼からみれば、「永杉のなかには、自分の絶対性が動いていない」ようにみえた。自他ともに「頭脳の存在」と認めている永杉には、難解なテーゼを日本社会の現実と整合させてとらえる「理解力」はあっても、日本の特殊的な現実をふまえながら労農主体の民主社会を構想する「創造力」はないように感じられたのである。このような永杉の特徴は日本の知識人の典型ともいえるのだが、彼らは日本の社会現実を変革する科学的理論をみずから構築することはできなかったのである。深見のいう「仕方のない正しさ」とは、自分たちの言葉を持たず、獄死という《現実的なもの》に脅かされながらも、《象徴権力》の前に跪拝せざるを得なかった知識人学生の葛藤を意味していたのである。

ところで、木山は「俺の性欲はひととは違うんだよ」と告白する。「暗い性欲」のために「暗い不断の苦しみ」を抱えていたと描写される。この木山の言葉を聞いた深見は、ブリュゲルの『淫蕩』の「自分の生殖器を肉切庖丁で切りとっている大のような顔をした人間の顔」を思い浮かべる。野間も「布施生のこと」（『短歌主潮』第一巻第二号、一九四八年九月）のなかで、布施が執行猶予で釈放されてきたとき、「愛慾の歌」を綴った短歌集をみせられて「心がふるへた」。布施が「性的な異常者であるという考え」につきまとわれ、始終苦しんでいたことなどを回想している。

布施は京都帝大文学部哲学科に在学していた当時、松本歳枝を通じて日本共産主義者団と接触を持ち、京大ケルンの結成につながった。だが一九三八年九月一日に日本共産主義者団の全国一斉検挙が発生し、二五日に布施、野口俊夫、椋梨實といった京大ケルンのメンバーが、治安維持法違反（コミンテルン・党・団・目的遂行）の容疑で検挙されてしまう。布施は三九年三月三日に起訴され、四〇年八月に懲役二年執行猶予五年に判決を受けて京都山科刑務所から出る。そこで松本歳枝との結婚問題で布施家から分家し、京都帝大を追われることになったのである。度を過ぎた性的快楽は性的享樂となつて激しい苦痛に変わる。それを禁じるのも《象徴的去勢》の一つの役割である。「暗い絵」のなかで、木山の苦しみは深見の苦しみに通じるとあるが、木山は深見が同一化する《想像的な他者》として描かれている。

野間の京都帝大在学時代の日記に、「変態性慾者」という自己認識がみられる（一九三五年七月二五日）。そして「穴があいているのや、穴や、それが我や」（同年二月七日）、「何か、俺の中に穴をあけている」「私を、それ（光子「君」）が、穴をあけることによって、私のその状態を責めていたのだ」（三六年一月四日）など、主体に《穴》が開いているという表現が頻出する。野間はその当時、富士正晴の妹光子に恋愛感情を抱き、性欲の昂進を抑えることのできない状態であった。野間にとって、光子は性欲を禁じる《象徴的な掟》として私に《穴》を開けていたのである。自我に《穴》を開けられることによって、過剰な性欲を抑制した野間の主体が立ち上がるのである。

「暗い絵」は、ブリュッゲルの絵に一九三〇年代の知識人学生 self画像を投影しながら、深見が「俺達の体の中にも、あんな風に穴が開いているんじゃないかな」と語った「あんな暗い不潔な穴の形をしたような魂」、すなわち彼らが主体化するのにもなった《象徴的去勢》——政治と性——を巧みに表現していたのである。

「崩解感覚」——トラウマと言葉

言葉は、ものごとを秩序立て、過去の出来事や経験を復元するための媒体である。だがそれら一切を語りつくすことはできず、つねに語りそこねてしまう余白が発生する。その余白に耳

を傾け、隠されていた意味をすくいあげてくれる他者が存在してはじめて、《話す主体の欲望》が生じる。

だが、私が同一化できるイメージが与えられず、私を位置づける法や規範がなければ、主体はどうなってしまうのだろうか。それを見事に描き出したのは「崩解感覚」である。及川隆一の胸裏に現れる「ぐにやりと肉のくだけ去る崩解感」は、《空虚な主体》そのものを表現している。

及川が下宿している常盤館で荒井幸夫の縊死体が発見された。夫を探して警察に届けるまでの間、荒井の部屋に待機しておいてほしいと下宿屋の女性から依頼されると、及川は「烈しい衝動」に襲われた。「以前戦場で彼が自殺をはかったときの、あの不気味なもののように自分の背後から自分においせまったものが、いままた自分の身近に再び近づいて来るかのように感じた」のであった。

かつて及川は湖北省天門の駐屯地で、手榴弾を用いて自殺を図ったことがあった。爆薬が炸裂するまさにその瞬間、「ぐにやりとした、肉のくずれ去る感覚、そして背骨の中を走る神経の束がぐしやりと引きちぎれて、自分の周囲に存在している外的世界や自分の内部に自分を形づくっている内的世界が形を失って行くような崩解感」に見舞われたのであった。首吊り死体を前に、死という厳粛な《現実そのもの》を目撃して、たちまち戦争の記憶をよみがえらせたのだが、それまでそれを意識下に押し退けていたのは、彼の強い羞恥心——「軍隊生活

の醜惡な圧迫と苦痛」から逃れようとしたのは、いくらいい訳をしても「哀れな弱者のもつ考え」にすぎない——によつてであつた。

腰から背骨にかけて生じる不快な感覚は、及川にとつて、過去のトラウマに起因する神経症の症候であつたのだが、死への衝動を意味すると同時に、性的快感に自我を忘失する享樂を指し示すアンビバレントなものでもあつた。及川は西原志津子に会いにゆくときはいつも「何か暗い錘のようなもの」——「烈しい焦燥感と虚無感」——を腰の辺りに感じていたのである。

志津子との飯田橋での待ち合わせに一時間以上遅れた及川は、「自分の体の内に一つの大きな奇妙な穴のようなもの」が開いていると感じる。「大きな空洞」に「細い奥深い肉の襞膜」が無数にある「腸詰」になつたかのであつた。志津子の「肌の弾力」だけがその「穴」を充たすことができたのであつて、「書物は彼を充たしはしない。ひとの心は彼を充たしはしない」と考えられた。知的教養や、自分が共感できるイメージを抱く他者ではなく、「肌の弾力」という《現実そのもの》に触れることでしか主体に近づけないところに、及川における《主体の空虚》と《他者の欠如》を指し示している。

死体が安置されている不気味な部屋は、過去の忌まわしい記憶をふたたびよみがえらせる危険があるのに、志津子に会えなかつた及川がふたたび荒井の部屋を訪れたのはなぜか。

その日対象を失つた志津子に対する欲望が、無理強いに求められた疲労のために彼の体の底でもつれて、なお欲望が完全に退潮せず、自分の欲望が自分の欲望でありながら、既に自分の五感からはなれてそこら辺りに漂うているというような、処理しがたい状態に彼が置かれていたからにすぎないのであつた。

及川が死体のある部屋を訪れたのは、「死者の慰霊」のためでも「敬虔の念」からでもなかつた。対象を得られなかつた欲望がみずからの欠如を充たそうとして対象を探していたのにすぎなかつた。荒井の死にかけつけた友人の学生から、最近荒井は「大学の学生課の女事務員」との恋愛が破局に終わったことを知らされる。及川は、友人の学生の「合いづちを打つ眼」が「屈從的な歪んだ動き」をしていたことから、それが「戦争に行つてきた人間の顔」であると感じ、「この男も、女に対する異常な嗜好を軍隊でおしえられてかえつてきているにちがいない」と確信した。荒井が恋愛に失敗して自殺し、及川が女性に「肉の弾力」しか求められないのは、年次と階級が絶対視され、凄惨な私刑リンチによつて規律が維持される軍隊組織に身をおいたとき、たとえ一時的ではあれ、性的快感に没頭することで暴力の恐怖を忘れさせる「命の洗濯（戦時性暴力）」の経験をしたからであつた。ここでようやく、及川において死への衝動と性的快樂が同じ「崩解感」として回帰する理由が分かる。及川が意識

下に抑圧しようとしている軍隊の記憶は、自殺未遂の原因となった私刑だけではなく、「女に対する異常な嗜好」を培った経験も重要なものであったといえよう。

及川が私刑のトラウマを想起するきっかけとなったのは、一週間ほど前、荒井が二階にある便所の扉のハンドルを何度も回している光景を想い出したことであつた。それは「かなり進行した偏執症状」で「自殺の徴候」と思われたのだが、荒井が縊死したのは「山猫のように人間共から追いつめられてだ」と思い至ると、及川は「腰部のかすかな疼痛」を感じはじめ、「いとわしい過去の一つの思い出が自分の記憶の蓄積の底から浮かび上ってくるにちがいない」と確信したのである。

作品の最後に至って、及川の脳裏に私刑の光景が再現される。過去のある記憶が後からトラウマになり、さらに遅れて、今度言葉がそのトラウマを追いかけるように到来する。これがトラウマと言葉に関する二重の《事後性》(Nachträglichkeit)である。「崩解感覚」は、無意識から取りだされる主体の歴史——数々の私刑の記憶が、自殺未遂の羞恥にまみれた経験によつて意識下に抑圧され、「ぐにやりと肉のくだける崩解感」という症状として回帰するようになっていた——が荒井の死という《現実そのもの》との遭遇を通じて記憶が《活性化》(Aktivierung)されることによつて、再構成されるプロセスを的確に表現している。

そもそも学校の後輩に当たる荒井は、及川がみずからの姿を

投影した鏡像的他者であつた。「自分」という軍隊での呼称をはじめ、靴下や麻ヒモの結び目などは軍隊生活の名残がみられ、日々の暮らしに不自由することのない家庭環境にあることなども、及川との間に共通点があつた。荒井の死に顔の特徴として、「幾らか広い額は、知力を思わせたが、口のつぐみの足りないその口の辺りは、彼の意志力の極度の欠乏を示すもの」が感じられ、顔全体からは「何か人生に対する焦燥感」が漂っていたというのも及川の心的現実の鏡像であつたといえるのではないか。

厳格な規律によつて統制管理された軍隊は、及川が生きる拠りどころにしていた知的教養がまったく意味をなさない場所である。「ゾルレン的にみて、ゾルレン的にみて……」という言葉で作品が閉じられるが、旧制高等学校の学生たちの教養形成に影響力のあつたカント道德哲学によれば、人間には社会からの強制や因襲的な良心の強制があつてはならない。自分で自分に与える法則以外のものに従うべきではない。人間の理性には、善をおこなう自由が与えられ、道德的実践が当為として命令されているという。まさにこのような教養主義的な世界観とは対極にある秩序、すなわち上官の命令が絶対的であるという組織が軍隊であつたのである。

「真空地帯」——私的制裁と軍法の起源

太平洋戦争末期、陸軍内で横行している私的制裁を禁じる通牒が木村兵太郎陸軍次官の名前で発出されている。「陸機第三七七六号」（一九四一年二月七日）は「私的制裁力軍隊ノ団結ヲ破壊シ対上官犯或ハ逃亡離隊等ノ重ナル動機ヲ醸成シ又軍民離間ノ素因トナルコトニ関死シテハ敢ヘテ贅言ヲ要セサル所ナルモ近時特殊編成部隊ノ増加ニ伴ヒ私的制裁激化ノ傾向ヲ看ルハ寔ニ遺憾ニ堪ヘサル所ナリ」という⁷。

大阪第四師団第三七連隊の留守部隊に配属されていた頃の体験にもとづいて、野間宏は軍隊の内務班生活にはびこる私刑の実態を「真空地帯」に描き出した。作品の時間設定は一九四四年一月とされ、中隊は、前年一二月に初入営した学徒出陣兵や三十代半ばになる補充兵の姿が目立つようになっていた。

この作品に描かれた数々の暴力のなかで最も印象的なのは、木谷利一郎一等兵が地野上等兵に私的制裁を加える場面であろう。五番立の不寝番に不満を持った地野が、「監獄がえり」を不寝番につけないのはなぜか、と曾田原二二等兵に抗議すると、今井上等兵や他の班員もそれに同調して「監獄がえり」をからかう。すると木谷は「けものほえるようなわめき声」を発し、地野のもとに走ってゆき、いきなり「四年兵の監獄がえりのバツチ」を喰らわせる。三年兵の地野は、木谷がまさか四年兵だと

は思わなかったのである。

地野が床のうえに倒れて動かなくなると、木谷は、今度は今井上等兵に拳骨を喰らわせ、三年兵、補充兵、初年兵の順に殴打した。曾田は、自分がこれまで誠意をもって木谷のために尽くした人間なので殴られないと思っていたにもかかわらず、木谷は「その打撃を少しもゆるめることなく力一ぱい拳骨で曾田の頬をなぐった」のである。木谷が自分を殴つたのは、大阪陸軍刑務所から仮釈放されて原隊復帰していたことを班内に漏らした、と木谷が誤解しているように曾田には思われた。

帝国陸軍には、兵の階級よりも入隊年次が優先し、軍紀では固く禁じられている私的制裁が黙認されていた。スラヴォイ・ジジェクは「コードレッド」、すなわち部隊の倫理基準を破つた兵士への暴力は、軍法を逸脱していても見逃されるという軍隊組織内の不文律に関して、「このような掟は、共同体の明文化された法に背いている一方で、共同体の精神を純粋な形で表象し、個々人に対して強い圧力をかけ、集団への同一化を迫る」という⁸。私的制裁は、成文法に違反するために公的には存在しないときれるにもかかわらず、組織への帰属意識を否応なしに強制するものであった。ジジェクはさらに、一連の禁止にもとづく集団的行動様式が《法》と呼ばれるものであるが、《法》の規範化以前に、そもそも《法》を《法》として立ち上げるために行使された始原の暴力が隠蔽されているとする。

法の「端緒」には、何らかの「法破り」が、暴力という何らかの実在界^{Real}があり、これが法の支配を確立する現象^{現象}そのものと合致しているというのだ。(中略) 法が自らを支えているこの非合法の暴力は、何としても隠されなければならない。この隠蔽こそ、法が機能する積極的な条件だからである。⁽⁹⁾

(ジジエク『為すところを知らざればなり』)

法の権威は正義から生じるのではなく、法の起源には無法の暴力があるという逆説。兵士を統制する軍紀という《象徴的なもの》を成立させているのは、暴力という《現実的なもの》であつたのだが、通常それは隠蔽されて不可視のものとされているのである。木谷の「監獄がえりのバッチ」は、軍紀の起源にある暴力という《現実的なもの》をかいまみさせると同時に、軍という暴力組織の中心部には、軍法の効力が及ばない《真空地帯》が存在していることを証明したのである。

「真空地帯」の小説構成において特徴的なのは、章ごとに木谷と曾田の視点が交互に入れ替わっていることである。二年三か月の刑期を繰り上げ、二年二か月で仮釈放された木谷が原隊復帰してから、歩兵砲中隊の第一班内で発生する事件を複眼的にとらえて語られている。「極悪な兵隊の例」とされた木谷と、大学出身者で中隊人事係助手を務める曾田との間には「打破ることのできない障壁」があるとされているが、両者は決して対

立する人物ではなく、むしろ実は心理的な転移関係にあつたのではないか。

木谷が原隊復帰して中隊事務室で曾田を目撃してから、木谷は自分の過去を曾田がすべて知っていると誤解している。事実、曾田は日報や雑報綴、炊事の給与伝票、犯罪情報の綴などの諸記録を渉獵することによって木谷の過去を知ることになる。「曾田はん、あんた、このわしのことをきいて知つてはるやろな」という木谷の言葉は、曾田が木谷の過去をすでに知っている他者——《知を想定された主体》——であることを伝えている。「眼の前にいる木谷の実在物よりも、このときには過去の木谷に心を奪われていた」という曾田は、いわば精神分析における《分析家》の立場にある。

その一方、曾田はひそかに木谷に自分の欲望を引き受けさせている。曾田にとつて、地野上等兵は彼が初年兵のとき班の整頓を担当し、しばしば彼を「しばき上げた」。入営する前、左官の手伝い業に徒弟として入っていた地野は「徒弟制度と軍隊制度が生んだ一つの典型的な人間」とされ、曾田は彼に憎悪を抱いている。「先刻の地野上等兵との事件で木谷と曾田の間には深いつながりができたようだ」と感じられ、曾田は「いつしか、自分が木谷のなか深くはいって行っていることに気づいた」。

「やるなら、やりやあがれ」という曾田の内心の声は、彼が大学卒業後、経済学と歴史学——マルクス経済学と唯物史観が

暗示されている——を学ぶ中学校教員として革命思想に感化されていたことも大きな影響を及ぼしている。曾田は、木谷に陸軍刑務所のことを尋ねるのだが、まるで彼が「自分自身に問うているような形の問」からはじまるのである。社会主義思想に染まって反軍思想を持つ曾田は自分もまた、木谷と同じように陸軍刑務所に勾留されるのではないかと恐れていたのである。

曾田は偶然、立沢中隊人事係准尉と金子軍曹が野戦行きのメンバーを入れ替える相談をしているのを立ち聞きする。不正な収賄によって木谷が転属することになった事実を明かせば、木谷は野戦行きの転属命令という「その自分の決定された道を自分で変更するだろう」と想像する。いくら部隊内で荒れまわってみても准尉の決定を覆せる見込みはなく「きつと木谷は逃亡するだろう」と思っていた。曾田が転属命令のいきさつを伝えなければ、木谷のその後の行動が起こり得なかったことを考えると、ここで曾田は自分の欲望を木谷に引き寄せたといえる。ただし、たとえ逃亡してもすぐに捕らえられ、木谷は曾田から情報を得ていたことを供述するにちがいない。そうなれば曾田は、反軍思想のために「動員の機密を不必要なときにもらしたという理由」によって、木谷と同じ軍機保護法違反の容疑で検挙されることになるだろう。曾田にとって、すでに捕えられた過去の経験を持つ木谷は、まだ到来していない自分の未来の姿であったのである。

曾田は軍隊組織を《真空地帯》——「兵営ハ条文ト柵ニトリ

マカレタ一丁四方ノ空間ニシテ、強力ナ圧力ニヨリツクラレタ抽象的社会デアル。人間ハコノナカニアッテ人間ノ要素ヲ取り去ラレテ兵隊ニナル」——と批判した。そして「このような人工的な抽象的な社会を破壊するにはどういう方法があるかと考えて行つたとき、彼の頭にはつきり浮び上ってくるのはやはり木谷一等兵であつた」。このような曾田の感情の高まりが木谷との心理的結びつきを深めるのだが、木谷が仮釈放されて復帰していたことが班内に知れると、曾田に対する木谷の様子が変わった。「木谷の顔がいつもとは全く相をかえてふるえている」のであつた。自分が木谷から疑われているのを察すると、それまで深く同情していたものの、実は「むしろ木谷をおそれているのではないか」と感じ、木谷が自分と同じように「はつきりした反戦的な社会主義的な思想」を持つている人間であるとも、単なる「窃盗犯」であるとも考えられなくなるのであつた。

結局、曾田は木谷から殴られる。本来なら、これをきつかけに転移が解消するはずであつた。《分析主体》が《分析家》を《知を想定された主体》とみなすことを止め、自分の無意識について、自分以上に分析家が詳しく知っていると考えるのを止めるとき、精神分析が終わりを迎えるように、曾田が木谷にとつての《知を想定された主体》であることが終わるはずであつた。曾田は「あの木谷の打った拳骨の打撃が自分の体をとらえているものをこなごなに打ちくだくのを感じた」とある。粉々に打ち砕かれた後、曾田の意識に残ったのは、木谷に対する恐れで

あった。その恐れとは、木谷の犯行内容ではなく、木谷が刑務所に服役した事実からもたらされるものであった。依然として曾田は木谷に自己の欲望——「木谷の手は真空地帯をうちこわす」——を引き受けさせつづけたのである。曾田の前に「木谷があらわれて以来、彼の軍隊に対する考えは次第にはつきりした一定の形をとりはじめてきた」のであった。

地野を打ちえるような激しい暴力性を内在させた木谷のイメージは、地野を打ちすえたいという曾田の欲望によつてつくりあげられた幻想ではなかったのか。曾田は、木谷が「監獄帰り」（さらにいえば、被差別部落の出身者であることが端々に暗示されている）であるのを知った後で、木谷には「監獄帰り」にふさわしい暴力的な性向が生来備わっているにちがいないと確信するようになっていったのである。軍法会議の裁判長井上中佐は、木谷の犯罪の原因を「単純に被告の出生にみようとす」のだとされたが、実は曾田も同じで、冤罪であったにもかかわらず刑務所での服役を余儀なくされた木谷の経歴から、曾田は週及的に木谷の暴力的な素因を考え出したのである。だがこの作品には、曾田の幻想に反するような木谷の性格、たとえば字が下手な方ではない、上官の覚えがよく順調に上等兵に進級したこと——野間も一九四三年三月一〇日陸軍兵精勤章を付与されている——なども描かれている。曾田がつくりあげた木谷の幻想は、この作品におけるドラマの動力源になっていたのである。そもそも木谷が危険思想を持っているという嘘を拵えたの

は、経理室には不正がはびこっているという木谷の主張を闇に葬ろうとした岡本検察官であった。中堀中佐と結託した岡本は、兵隊が口にすべきではない上官への非難を「危険思想」とみなして取り調べを厳しくした。木谷の事件を利用して中堀たちの不正を明るみに出そうとしていた林でさえ、その訊問は「はるかに軍人精神にふさわしいこと」と認めざるをえないほどであったのである。

木谷が再び林のもとへ行き、拳骨で滅多打ちにした。自分をおとし入れた首謀者は中堀と金子であったことが分かったにもかかわらず、林への恨みは消えなかったのである。林は膝をつきながら「貴様。どういうわけでこの俺が、貴様にわざわざ、あんな話をしたと思うのや……、いまでも、俺は金子のところへこれから行って、貴様のためにはなしてやる、つもりでいたのに。そのこの俺に、貴様……」といった。軍法会議の顛末とその黒幕を知っていた林は、木谷にとって《知を想定された主体》であった。そもそも木谷の窃盗事件の発端は、木谷の事件を利用して経理室の不正を暴こうとした林の欲望にあったのである。

曾田が殴られたように、林もまた殴られる。だが、自分の知らないところで自分をまもるために動こうとしていたという林のこの言葉は、木谷の曾田に対する転移関係が再開するきっかけとなる。

中隊事務室で准尉を詰問する木谷は、「木谷を外へだせ」という准尉の命令によって近づいてきた曾田の「その顔の白いの

をみた」。曾田から聞いた話をすべてぶちまけてしまおうと思っていたが、「自分の方へやってくる曾田をみると、彼の口はひらかなかった」。事務室を出た曾田は「木谷はん、すまん」というと、木谷は「いいや」といって「はっきりした笑くぼをだして曾田に笑った」。曾田が「木谷はん、金子班長の話、自分からきいたと准尉さんにくれはつても、いいですよ」というと、木谷は再び「いいや、ええよ」と答えたのである。まさに曾田の思惑通りに事が運んだのである。

最後の第七章は木谷の視点から描かれ、輸送船に乗った木谷の姿でこの小説が終わる。曾田が木谷に真相を明かしたことは隠されたまま、すなわち曾田が検挙されることはなかったのである。おそらく曾田は内地で戦後まで生き残り、木谷の目撃者として木谷の事件を語りつぐであろう。

注

- (1) スラヴォイ・ジジエク『もつとも崇高なヒステリー者』（鈴木國文訳、二〇一六年三月、みすず書房、二七六頁）
- (2) 同右
- (3) スラヴォイ・ジジエク『真昼の盗人のようにーポストヒューマニティ時代の権力』（二〇一九年七月、青土社、一一九頁）
- (4) 同右、一一八頁。
- (5) 小野義彦『昭和史』を生きて』（一九八五年四月、三一書房、一七六、六一頁）
- (6) 布施辰治『日本共産党事件弁論速記』（現代史資料）第一八巻「社会

主義運動」第五巻、一九六六年九月、みすず書房、四〇二頁）、布施によれば、拘留中の人たちに加えられる「白色テロ」は、「共産党員の国賊呼わり、或は天皇の敵であるから殺しても構はない、殺しても自分等は執行猶予であることを放言して、ひどい目に合はせるところの惨虐が行はれるのである」という。

- (7) 「JACAR（アジア歴史資料センター）RefC0100773600」陸密綴昭和十四年（防衛省防衛研究所）」
- (8) スラヴォイ・ジジエク『ラカンはいこう読め！』（鈴木晶訳、二〇〇八年二月、紀伊国屋書店、一五三頁）
- (9) スラヴォイ・ジジエク『為すところを知らざればなり』（鈴木一策訳、一九九六年二月、みすず書房、三四一頁）

「おにし やすみつ 本学教員」